

雪解

永井荷風

青空文庫

兼太郎かねたろうは点滴の音に目をさました。そして油じみた坊主枕ぼうずまくらから半白はんぱくの頭もたを擡もちげて不思議ふしぎそうにちよつと耳みみを澄すました。

枕元いっけんに一間の出窓がある。その雨戸の割目われめから日の光が磨硝子すりガラスの障子に幾筋いくすじも細く糸いとのようにさし込んでいる。兼太郎は雨だれの響ひびきは雨が降っているのではない。昨日午きのうひる後ごから、夜も深ふけるに従したがつてますます烈はげしくなつた吹雪が夜明と共にいつかガラリと晴れたのだという事を知つた。それと共にもうかれこれ午ひる近くだろうと思つた。正月も末、大寒だいかんの盛さかにこの貸二階の半分西を向いた窓に日がさせば、そろそろ近所の家から鮭さけ干ひ物を焼く匂におひのして来る時分じぶんだという事は、丁度去年の今時分初めてこの二階を借りた当時、何もせずにぼんやりと短い冬の日脚ひあしを見てくらししたので、時計を見るまでもなく察する事が出来るのであつた。それにつけても月日のたつのは早い。また一年過ぎたのかなと思つと、兼太郎は例の如く数えて見ればもう五年前株式の大崩落だいほうらくに家倉をなくなし妻には別れ妾めかけの家からは追出されて、今年丁度五十歳の暁とうとう人の家の二階を借りるまでになつた失敗の歴史を回想するより外ほかはない。以前は浅草あさくさ瓦町かわらまちの電車通どおりに商店を構えた玩具がんぐ雜貨輸出問屋の主人であつた身が、現在は事もあろうに電話と家屋の売買を周旋

するいわゆる千三屋の手先とまでなりさがってしまったのだ。昨日も一日吹雪の中をあつちこつちと駈け廻って歩く中一足しかない足駄の齒を折ってしまった事やら、ズブ濡にした足袋のまだ乾いていようはずもない事なぞを考え出して、兼太郎はエエまよ今日はいっそ寝坊ついでに寝て暮らせと自暴な気にもなるのであった。もともと家屋電話の周旋屋というのは以前瓦町の店で使っていた男がやっているので、一日や二日怠けた処で昔の主人に対して小言のいえようはずもなく解雇される虞もない……。

窓の下を豆腐屋が笛を吹いて通って行った。草鞋の足音がぴちやぴちやと聞えるので雪解の下を豆腐屋が笛を吹いて通って行った。草鞋の足音がぴちやぴちやと聞えるので雪解のひどい事が想像せられる。兼太郎は寝過してかえっていい事をしたとも思った。突然ドシーンとすさまじい響に家屋を震動させて、隣の屋根の雪が兼太郎の借りている二階の庇へ滑り落ちた。つづいて裏屋根の方で物干竿の落ちる音。どうやら寝てもいられないような気がして兼太郎は水洩を嚙りながら起上った。すぐに窓の雨戸を明けかけたが、建込んだ路地の家の屋根一面降積った雪の上に日影と青空とがきらきら照輝くので暫く目をつぶって立ちすくむと、下の方から女の声で、

「田島さん。家の物干竿じゃありませんか。」

兼太郎のあけた窓の明りで二階中は勿論の事、梯子段の下までぱつと明るくなった処

からこの家の女房は兼太郎の起きた事を知ったのである。

「どうだか家じやあるまいよ。」と兼太郎はそんな事よりもまず自分の座敷の火鉢に火種が残っているか否かを調べた。

「田島さんもうじきお午ですよ。」

襖の外で言いながら、おかみは梯子段を上り切つて突当りに一間ばかり廊下のようになつた板の間から、すぐと裏屋根の物干へ出る硝子戸をばびりびり音させながら無理に明けようとしている。いつも建付けの悪いのが今朝は殊更雪にしめつて動かなくなつたのであろう。

この硝子戸から物干台へ出る間の軒下には兼太郎の使料になつてゐる炭と炭団を入れた箱にバケツが一個と洗面器が置いてある。

「あら、まア田島さん。炭も炭団もびしよぬれだよ。昨夜の中にどうにかしてお置きなされアいいのにさ。」

物干竿を掛直したかみさんは有合雑布で赤ぎれのした足の裏を拭き拭き此度は遠慮なくがらりと襖を明けて顔を出した。眉毛の薄い目尻の下つた平顔の年は三十二、三、肩のいかつた身体付のがつしりした女であるが、長年新富町の何とやという待合

の女中をしていたとかいうので襟付えりつきの紡績縞ぼうせきじまに双子ふたごの鯉こい口半纏くちはんてんを重ねた襟元に新しい沢瀉屋おもだかやの手拭てぬぐいを掛け、藤色てがらの手柄てがらをかけた丸髻まるまげも綺麗きれに撫付なでけている様子。まんざら路地裏かかあの噂うわさとも見えない。以前奉公先なる待合の亭主の世話で新富座しんふざの長吉ちようきちと鼻肩ひいきの客には知られている出方でかたの女房になつて、この築地二丁目つきじ本願寺横手ほんがんじの路地に世帯よたいを持つてからもう五年ほどになるがまだ子供はない。

「おかみさん。湯に行つて暖たまつて来よう。今日は一日いちにち楽らくみだ。」と兼太郎は夜具を踏んで柱の釘くぎに引掛けた手拭を取り、「大将はもう芝居かえ。一幕ひとまくのぞいて来ようかな。」

「播磨屋はりまやさんの大蔵卿おおくらきよう、大変にいいんですとさ。」

「おかみさんまだ見ないのか。」

「お正月は御年始廻りおねんしまわや何かで家の人がいそがしいもんだから。」と女房は襟にかけた手拭あねを姉さまかぶりにして兼太郎の夜具を上げ、

「ゆつくり行つてお出なさい。綺麗に掃除して置きますよ。田島さん、そうそう持つて来るのを忘れてしまった。牛乳が火鉢の処に置いてありますよ。」

「今朝はもう牛乳はぬきだ。日が当つてもやつぱり寒い。」と兼太郎は楊枝ようじをくわへ

て寝衣ねまきのまま格子戸こうしどを明けて出た。

路地の雪はもう大抵両側の溝板どぶいたの上に掻き寄せられていたが人力車じんりきしゃのやつと一台通れるほどの狭さに、雪解しずくの雫は両側に並んだ同じような二階家やの軒からその下を通行する人の襟えりくび頸くびへ余沫しづきを飛ばとばしている。それを避けようと思つて何方どちうかの軒下へ立寄ればいきなり屋根の上から積つた雪が滑り落ちて来ないともわからぬので、兼太郎は手拭を頭の上に載せ、昨日齒を割つた足駄ひきずを曳摺りながら表通おもてどおりへ出た。向側は一町ほども引続いた練堀ねりべいに、目かくしの椎しいの老木が繁茂した富豪あきの空屋敷。此方こなたはいろいろな小売店のつづいた中に兼太郎が知つてから後自動車屋のちが二軒も出来た。銭湯せんとうもこの間にある。蕎麦屋そばやもある。仕出屋しだしやもある。待合もある。ごみごみしたそれらの町家まちやの尽る処、備前橋びぜんばしの方へ出る通とおとの四辻よつ辻に遠く本願寺の高い土堀と消防の火見櫓ひのみやぐらが見えるが、しかし本堂の屋根は建込んだ町家の屋根に遮さへぎられてかえつて目に這入はいらない。区役所の人夫が掻き寄せた雪を川へ捨てにと車に積んでいゝのを、近処の犬が見て遠くから吠ほえている。太い電燈の柱の立つているあたりにはいつの間誰がこしらえたのか大きな雪達磨ゆきだるまが二つも出来ていた。自動車の運転手と鍛冶屋かじやの職人が野球の身構みがまえで雪投げをしている。

兼太郎は狭い路地口ろじぐちから一足外へ踏み出すと、別にこれと見処もないこの通をばいつも

ながらいかにも明るく広々した処のように感じるのであった。そして折々自分はどうしても路地に生れて路地に育った人間ではない、死ぬまでにいつか一度元のように表通に住んで見たいものだと思ふ事もあるのであった。兼太郎がこの感慨は湯屋の硝子戸を明けて番台のものに湯銭を払う時殊更深くなる事がある。

築地のこの界限にはお妾新道という処もある位で妾が大勢住んでいる。堅気の女房も赤い手柄をかける位の年頃のものはお妾に見まがうような身なりをしている。兼太郎は番台越しに女湯で着物をぬぎかける女の中に、小作りのぼつちやりした年増盛のお妾らしいものを見ると、以前代地河岸に困つて置いた自分のお妾の事を思い出すのである。名はお沢といった。大正三年の夏歐洲戦争が始まってから玩具雜貨の輸出を業とした兼太郎の店は大打撃を受けたので、その取返しをする目算で株に手を出した。とんとん拍子に儲かったのがかえつて破滅の本であった。四、五年成金熱に浮かされている中、講和条約が締結され一時下つた相場はまた暫く途拍子もなく絶頂に達したかと思ふと忽にしてまた崩落した。兼太郎は親から譲られた不動産までも人手に渡して本妻の実家へ子供をつれて同居するという始末、代地河岸に困つてあつたお妾のお沢は元の芸者の沢次になった。幸い妾宅の家屋はお沢の名義にしてあつたので、兩人話合の末それを売つて新

に芸者家沢の家の看板を買う資本にした訳である。兼太郎は本妻との間にその時八つになる男と十三になる娘があつたにもかかわらず、いつか沢の家に入りびたりとなつた。本妻の実家は資産のある金物問屋の事とて兼太郎の身持に呆れ果て子供を引取つて養育する代り本妻お静の籍を抜きやがて他へ再縁させたという話である。

丁度そんな話のあつた頃から兼太郎は沢次の家にもどうやら居辛いようになって来た。初めの中は旦那の落目に寝返りをしたなどと言われては以前の朋輩にも合す顔がない。今までお世話になつた御恩返しをするのはこれからだと沢次は立派な口をきいていたが、一年二年とたつ中いつか公然と待合にも泊る。箱根へ遠出にも行く。兼太郎は我慢をしていたが、遂には抱えの女供にまで厄介者扱にされ出したのでとうとう一昨年の秋しよんぼりと沢の家を出た。さすがに気の毒と思つたのか沢次はその時三千円という妾宅を売つた折の金を兼太郎に渡した。以後兼太郎はあつちこつちと貸間を借り歩いた末、今の築地二丁目の出方の二階へ引越して来た時には、女から貰つた手切の三千円はとうに米屋町で大半なくしてしまい、残の金は一年近くの居食にもう数えるほどしかなかった。

雪は止んだ。裸虫の甲羅を干すという日和も日曜ではないので、男湯には唯一人生

花^{けばな}の師匠^{ししやう}とでもいうような白髭^{しろひげ}の隠居^{おんこ}が帯を解いているばかり。番台の上にはいつも見る婆^{ばあ}も小娘^{こなな}もない。流し^{きふだ}の木札^{きふだ}の積^きんである側^{そば}に銅貨^{どうが}がばらばらに投出^{ていしゅつ}したままになつてゐるのは大方^{おほま}隠居^{おんこ}の払^{はら}つた湯銭^{ゆせん}であろう。兼太郎も湯銭を投出^{ていしゅつ}して下駄^{げだ}をぬごうとした時、ガラガラと女湯の戸をあけて入つて来た一人の女がある。

色系^{しきい}の入^いつた荒^{あら}い緋^{かすり}の銘仙^{めいせん}に同じような羽織^{うぎ}を重ねた身なりといい、頗^{あこ}の出^でた中低^{なかびく}な顔立^{かおだて}といい、別に人の目を引くほどの女ではないが、十七、八と覺^{おほ}しいその年頃^{としごろ}とこの辺^{へん}では余り見かけない七三^{しちさん}に割^わつた女優^{じやうゆう}鬚^{まげ}とに、兼太郎は何の氣もなくその顔を見た。娘^{むすめ}の方^{かた}でも番台を間に兼太郎の顔を見るといかにも不審^{ふしん}そうに、手にした湯銭をそのまま暫^{しばら}く土間^{どま}の上に突立^{つった}つていたが、やがて肩^{かた}で呼吸^{いき}をするように、

「まあお父^{とつ}さんしばらくねえ。」といったなり後^{あと}は言葉^{ことば}が出ぬらしい。

「お照^{てゐる}。すっかり見^みちがえてしまつたよ。」

兼太郎は人のいないのを幸^{さい}い番台^{ばんだい}へ寄^よりかかつて顔^{かほ}を差^さ伸^のした。

「お父^{とつ}さんいとお引越^{ひきこ}しになつたの。」

「去年^{こぞ}の今時^{いまじ}分^{ぶん}だ。」

「じゃ、もう柳^{やなぎ}橋^{はし}じやないのね。」

「お照、お前は今どこにいるのだ。御徒町のお爺さんの処にいるんじゃないのか。」

お照は俄に当惑したらしい様子で、「今日はアノ何なの——ちよつとそこのお友達の内へ遊びに来ていますよ。」

「何しろここでお前に逢おうとは思わなかった。お照、すぐそこだから歸りにちよつと寄つておくれ。お父さんはすぐその炭屋と自転車屋の角を曲ると三軒目だ。木村ツていう家にいるんだよ。曲つて右側の三軒目だよ。いいか。」

その時戸を明けて貸自動車屋の運転手らしい洋服に下駄をはいた男が二人、口笛でオペラの流行唄をやりながら入つて来たので、兼太郎はただ「いいかねいいかね。」と念を押しながら本意なくも下駄をぬいで上つた。お照は氣まりわる氣に軽く首肯いて見せるや否や男湯の方からは見えないズット奥の方へ行つてしまった。

茶の間の長火鉢で惣菜を煮ていた貸間のかみさんは湯から歸つて来た兼太郎の様子に襖の中から、

「田島さん。御飯をあがるんなら蒸して上げますよ。煮くたれててよければお汁もあります。どうします。」

「お汁は沢山だ。」と兼太郎は境の襖を明けて立ちながら、「おかみさん、不思議な事もあるもんだ。まるで人情ばなしにでもありそうな話さ。女房の実家へ置き去りにして来た娘に逢ったんだ。女湯もたまにやア覗いて見るものさ。」

「へえ。まア——。」

「その時分女房は三十越していい年をしていやがったが、よくよくおれに愛想をつかしやアがったと見えて他へ片付いてしまやアがったんで、つい娘や子供の事もそれきり放捨つて置いたんだがね、数えて見るともう十八だ。」

「この辺においでなさるんですか。まアこつちへお入んなさい。」

「湯ざめがしそうだから着物を着て来よう。おかみさん娘が尋ねて来るはずなんだ。あんまりじじむさい風も見せたくないよ。」

兼太郎は二階へ上り着物を着換えてお照の来るのを待った。午飯を食べてしまったが一向格子戸の明く音もしない。兼太郎は窓を明けて腰をかけ口に唧えた敷島に火をつける事も忘れて、路地から表通の方ばかり見つめていたが娘の姿は見えなかった。お照はやはりおれの事をよく思っていないと見える。人情のない親だと思うのも無理はない。尋ねて来ないのも尤もだ。手の甲で水漬をふきながら首をすつ込めて窓をしめると、何処

かの家の時計が二時を打ち、斜ななめに傾きかけた日脚ひあしはもう路地の中には届かず二階中は急に薄暗くなつた。長い間窓に腰をかけていたので湯冷ゆやめもする、火鉢の火を掻立てて裏の物干ものかんへ炭団たんじんを取りに行くとポンポン鳥鍋とりなべの匂においがしている。隣家となりは木挽町こびきちょうの花柳病院かりゆうの助手こなただとかいう事で、つい去年の暮看護婦を女房むらに貰つたのである。二階から此方の家の勝手口へ遠慮なく塵ちりを掃き落すというので出方でかたのかみさんは田舎者は仕様がないとわくるく言切きりっている。兼太郎は雪に濡ぬれた炭団たんじんをつまんで独り火を起すその身に引くらべると、貰もらつて間まもない女房と定めし休暇と覺しい今日の半日を楽しく暮す助手の身の上わけが訳もなく羨うらやましく思われたので、聞くともなく物干一つ隔てた隣の話声に耳をすました。すると物干の下なる内の勝手口で、

「おかみさん、留守かい。おかみさん。」と言う男の声。物干の間から覗のぞいて見ると紺このももひきももひき唐とう栈さん縞しまの双子ふたごの尻しりを端折り、上に鉄無地てつむじの半合羽はんがっぱを着て帽子かぶも冠かんらぬ四十年輩あばたの薄い痘痕あばたの男である。

「伊三いさどん、大変な道だろう。さアお上り。」水口みずぐちの障子を明けたかみさんは男の肩へ手をやって、

「今日は二階にいるんだからね。」と小声に言つた。

「そうか。貸間の爺かい。じゃまた来ようや。」

「何、いいんだよ。さア伊三どん。お寒い。」

男を内へ上げた後、かみさんは男の足駄を手早く隠してぴたり水口の障子をしめた。

男は伊三郎という新富町見番の箱屋で、何でもこの家のおかみさんが待合の女中をしている時分から好い仲であつたらしい。兼太郎は去年の今頃は毎日二階にござろしにいたので様子は委しく知っているのであつた。その時分には二人は折々二階へ気を兼ねて別々に外へ出て行つた事もあつた。

兼太郎は炬燵に火を入れて寝てしまおうかと思つたが今朝は正午近くまで寝飽きた瞼の閉じられようはずもないので、古ぼけた二重廻を引掛けてぶいと外へ出てしまった。本より行くべき処もない。以前ぶらぶらしていた時分行き馴れた八丁堀の講釈場の事を思付いて、其処で時間をつぶした後地藏橋の天麩羅屋で一杯やり、新富町の裏河岸づたいに帰つて来ると、冬の日は全く暮果て雪解の泥濘は寒風に吹かれてもう凍っている。

格子戸をあけると、わざとらしく境の襖が明け放しになつていて、長火鉢や箆笥や縁起棚などのある八畳から手水場の開戸まで見通される台処で、おかみさんはたつた

一人後向うしろむきになつて米を磨といでいた。

「おかみさん。とうとう来なかつたか。」

「ええ。お出いでになりませんよ。」とかみさんは何故なぜか見返りもしない。

兼太郎はわけもなく再びがっかりして二階へ上るや否や二重廻を炬燵の上へぬぎすてそのままごろりと横になった。向う側の吉川よしかわという待合で芸者がお客と一所に「三千歳みちとせ」を語っている。聞くともしに聞いている中、兼太郎はいつかうとうとしたかと思うと、

「田島さん、田島さん。」と呼ぶ声。

階下したのかみさんは梯子段はしごだんの下の上あがりへ出て取次をしている様子で「お上んなさいましよ。きつと転寝うたたねでもしておいでなさるんだよ。まだ聞えないのか知ら。田島さん。

田島さん。」

兼太郎は匆起はねおきて、「お照か。まアお上り。お上り。」といいながら梯子段を駈下かけおりた。

お照は毛織の襟巻えりまきを長々とコートの肩先ひざから膝まで下げ手には買物の紙包を抱えて土間に立っていた。兼太郎は手を取らぬばかり。

「お照。よく来てくれたな。実はもう来やしまいと思つていたんだ。おれも今方いまがた帰つて来た処だ。さア二階へお上り。」

「じや御免なさいまし。」とかみさんの方へ何とつかず挨拶あいさつをしてお照は兼太郎につづいて梯子段を上った。

「お照、ここがお父さんとつのいる処だ。お父さんも随分變つたろう。」と兼太郎は火鉢の火を掻き立てながら、「ぬがないでもいいよ。寒いから着ておいで。」

けれどもお照は後向になつてコートと肩掛とを取乱された六畳の間の出入口に近い襖ふすまの方ほうに片寄せながら、

「さつき昼間うちの中來ようと思つたんですよ。だけれどお友達と浅草あさくさへ行く約束をしたもんだから。」

「そうか、活動か。」と兼太郎は小形の長火鉢をお照の方へと押出した。

「お父さん、これはつまらないものですけれど、お土産みやげなの。」

「何、お土産だ。それは有難い。」と兼太郎は真実嬉うれしくてならなかったので、お照が火鉢そばの傍へ置いた土産物を膝ひざの上に取つて包紙を開きかける。土産物は何かの缶詰であつた。

「お父さん、やつぱり御酒おさけを上るんでしょう。浅草にや何もないのよ。」

「ナニこれアお父さんの大好きなものだ。」

兼太郎は嬉^{うれ}涙^{しなみだ}に目をぱちぱちさせていたがお照は始終頓^{とん}着^{ちやく}なくあたりを見廻す床^{とこ}の間に二合鑊^{びん}が置いてあるのを見ると自分の言つた事が当つていたので急に笑いながら、

「お父さん、やつぱり寝る時に上るんですか。」

「何だ。はははは。とんだものを目付^{めつ}かつたな。何、これア昨夜雪^{ゆうべ}が降つたから途中で一杯やつたら、もういいというのに間違えてまた一本持つて来やがったからそのまま懷^{ふところ}中へ入れて来たんだ。」

「お父さん、今夜はまだなの。お上んなさいよ。わたしがつけて上げましょう。」

丁度手の届くところに二合鑊があつたのでお照はそれをば長火鉢の銅壺^{どうこ}の中に入れようとして、

「この中へ入れてもいいんでしょう。」

兼太郎は唯首肯^{うなず}くばかり、いよいよ嬉しくて返事も出来ず涙ぐんだ目にじっとお照の様子を見詰^{みつめ}るばかりである。お照が二合鑊を銅壺の中に入れる手付きにはどうやら扱い馴^なれた処が見えた。

兼太郎は昼間湯屋の番台で出逢^{であ}つたその時から娘の身の上が聞きたくてならなかった。しかし以前瓦^{かわらまち}町に店があつた時分から子供の事は一切^{いっさい}母親のお静にまかしたなり、

ろくろく顔を見た事もなかった位。朝起きる時分には娘はもう学校に行っている。娘が帰って来る時分には兼太郎は外へ出て晩飯は妾宅しやうたくで食べ十二時過ぎでなければ帰っては来なかつたので、今日突然こんなに成長した娘の様子を見ると、父親としてはいかにも済まないような心持もするしまた何となく恨んでいはせまいかと恐ろしいような気もして、兼太郎はききたい事も遠慮して聞かかねるのであった。

実際その時分には兼太郎は女房の顔を見るのがいやでいやでならなかつたのだ。気がきかなくてデブデブ肥ふとっている位ならまだしも事生れ付きひどい腋臭わきががあつたので嫌いだ。いたあまり自然その間に出来た子供にまでよそよそしくするようになった訳わけである。兼太郎がその頃目ころもをつける芸者は岡目よそめには貧相ひんそうだと言われる位な瘦立やせだちな小作りの女ばかり。旅籠町はたごちやうへ遂に妾宅まで買ってやつた沢次さわじの外ほかに、日本橋にほんばしにも浅草にも月々きまつて世話をした女があつたが、いずれも着瘦きやせのする小作こつくりな女であつた。大柄な女はいかほど容貌けいようがよく押し出しが立派でも兼太郎はさして見返りもせず、ああいう女は昔なら大おおまが籬きの華魁おいらんにするといい、当世なら女優向きだ、大柄な女は大きなメジ鰯まぐろをぶつころがしたようで大味おおあじだと冗談をいつていたのもそのはず、兼太郎は骨格はしつかりしてはいたが見だてのない小男なので、自分よりも丈せいの高い女房のお静が大一番おおいちばんの丸髻まるまげ姿を見

ると、何となく圧服あつぷくされるような気がしてならないのであった。

それこれと当時の事を思い出すにつけて兼太郎は娘のお照が顔立は母に似ているが身からだ体付つきは自分に似たものかそれほどデクデクもしていないのを見ると共に、あの母親の腋臭はどうなっただろうと妙な処へ気を廻した。しかしそれは折から階下したのかみさんが焼き初めた寒餅かんもちの匂においにまぎらされて確かめる事が出来なかった。

お照は火針へ差かざす手先に始終お燭かんを注意していたが寒餅の匂に気がついたものと見え、「お父さん御飯はどうしているの。下でおまかないするの。」

「家うちにいる時はそうするがね。毎日桶おけ町ちょうまで勤めに行くからね、昼は弁当だし帰りにや花村かどこかで一杯やらアな。」

「お父さん。それじゃ今は勤め人なの。」

「碌ろくなものじゃないよ。お前は子供だったから知るまいが、瓦町の店へ来た桑崎くわさきという色の黒い太った男だ。それが今成功して立派な店を張っているんだ。そこへ働きに行くのさ。」

「桑崎さん、覚えているわ。どこだかお国の人でしょう。この頃はどこへ行ってもお国の人ばかりねえ。お国の人が皆成功するのねえ。」

「お父さん見たようになってなつちや駄目だ。御徒町のおじいさんも江戸ッ児じやないよ。」

兼太郎は話が自然にここへ巡つて来たのを機会にその後の様子を聞こうと、「お照。お前母さんがお嫁に行く時なぜ一所について行かなかつたんだ。連れ児はいけないというはなしでもあつたのか。」

「そうでもないけれど……。」とお照は兼太郎の見詰める視線を避けようとでもするらしく始終伏目になっていたが、「お父さん、もうお爛がよさそうよ。どうしましょう。」指先で二合罎を摘み出して灰の中へそつと雫を落している。

「お照、お前どこでお爛のつけ方なんぞ覚えてんだ。」

「もう子供じやないんですもの。誰だつて知つてゐるわ。」と猫板の上に載せながら、

「お父さんお盃はどこにあるの。」

兼太郎は肝腎な話をよそにして夜店で買った茶棚の盃を出し、

「どうだお前も一杯やるさ。お爛の具合がわかる処を見ると一杯位はいけるだろう。」

「わたしは沢山。」とお照は罎を取上げて父の盃へついだ。

「お照。お前にめぐり遇つた縁起のいい日だからな。」とぐつと一杯干して、「お父さんがお酌をしよう。飲めなければ飲むまねでもいいよ。」

「そう。じゃついで頂戴。^{ちようだい}」

お照は兼太郎が遠慮して七分目ほどついた盃をすぐに干したばかりか火鉢の縁で盃の雫を拭^{ぬぐ}つて返す手つき、いよいよ馴れたものだと思兼太郎は茫然^{ぼうぜん}とその顔を見詰めた。

「お父さん。いやねえ。先刻^{さつぎ}から人の顔ばかり見て。わたしだっていつまでも子供じゃないわ。」

「お照、お前、お母さんがお嫁に行つてから会つたか。」

「いいえ。東京にやいないんですつて、大阪にお店があるんですとき。」

「角太郎^{かくたろう}はどうしている。お前が十八だと角太郎は十三だな。」

「角ちゃんは今だつてちゃんと御徒町にいますでしょう。男ですもの。」

「女だといられないのか。」

「いられないつていうわけもないけれど、わたしが悪かつたのよ。おじいさんの言う事をきかなかつたから。」

「そんなら謝罪^{あやま}ればいいじゃないか。謝罪つてもいけないのか。」

「外の事^{ほか}と違うから、今更帰れやしませんよ。こうしている方が吞氣^{ほう}だわ。」

「外の事とちがう。どんな事なんだ。」

「どんな事ツて、その中^{うち}に言わなくつても分りますよ。お父さんも道楽した人に似合わないのね。」

「わかつたよ。だが、どうもまだよくわからない処があるな。お照、何も氣まりをわける事はねえや。そんな事をいつた日にやお父さんこそ、お前に合す顔がありやしない。お前がちやんとおとなしく御徒町の家にいた日にや途中で逢^あつたつて話も出来ない訳^{わけ}なんだ。そうだろう。乃公^{おいら}は女房や子供をすてた罰で芸者家からもうとうとお履物^{はきもの}にされちまつた。それだから、こうしてお前と話もしていられるんだ。」

「それアそうねえ。わたしが御徒町の家を出たからつてお父さんが先^{せん}のように柳橋^{やなぎばし}にいたら、やつぱり何だか行きにくいわね。お父さん、何故^{なぜ}柳橋と別れたの。」

「別れたんじゃない。追出されたんだ。もうそんな過ぎ去つた話はどうでもいいや。それよりか、お照、お前の話を聞こう。表のお湯屋で逢つたんだからこの近所にや違いなかうが、何処にいるんだえ。お嫁にでも行つたのか。」

「ほほほ。お父さん。わたしまだやつと十八になつたばかりよ。」

「十八なら一人前の女じゃないか。お嫁にだつて何だつて行けるぜ。自分でもさつきもう子供じゃないつて言つてたじゃないか。」

「それアいろんな心配もしたし苦勞もしたんですもの。」

「お爛はつけるしお酌はできるし、隅すみにや置けなそうだな。お父さんに似ていろんな事を覚えてたんだろう。はははは。当て見ようか。お茶屋の姐ねえさんにしちや髪や風俗なりがハイカラだ。まずカツフェーかバーという処だが、どうだ。お照、笑つてばかりいないで教えたつていいじゃないか。」

「てつきりお手の筋すじですよ。」

「やつぱりカツフェーか。どうもそうだろうと思った。この近処にやしかし気のきいたカツフェーはねえようだが、何処だい。」

「この間まで人形にんぎょう町の都みやこバーにいたんですよ。だけれどももうよしたの。先に日比谷やにいた時お友達になつた姐さんがこの先の一丁目に世帯を持っているから二、三日泊りながら遊びに来ているのよ。もう随分遊んだからそろそろまた働かなくちゃならないわ。」

「カツフェーは随分貰もらいがあるという話だがほんとかい。月にいくら位になるもんだね。」

「そうねえ、一番初めまだ馴なれない時分でも三、四十円にはなつてよ。銀座にいた時にはやつぱり場所だわね。百円はかかさなかつたわ。だけれども急がしい処は着物にかかるからつまり同じなのよ。」

「ふーむ偉いもんだな。どうしても女でなくちゃ駄目だ。お父さんなんか毎日足を棒にして歩いたっていくらになると思う。やつと八十円だぜ。その中で二十円は貸間の代に、それから毎日食べて行かなくちゃならないからな。そこへ行くと三十円でもくらしが出なれア楽だ。」

「だから残そうと思えば随分残るわけなのよ。中には五百円も六百円も貯金している人もあるけれど、何の彼^かのつて蓄^{たま}つたかと思うとやつぱり駄目になるんですとき。だからわたしなんぞ貯金なんかした事はないわ。有る時勝負で芝居へ行ったり活動へ行ったりして使つちまうのよ。」

「お客様に連れて行ってもらうような事はないのかい。カッフェーだって同じだろう。お茶屋や待合の姐さんと同じように好いお客や旦那があるんだろう。」

「ある人はあるし無い人はないわ。お父さんもうこれでおつもりよ。」

お照は二合壘^{さかさ}を倒^さにして盃^{うち}につき、「何時でしょう。わたしもうそろそろお暇^{いとま}しなくちやならないわ。二、三日中^{うち}に行くところがきまつたら知らせるわ。」

「まだいいやな。あの夜廻^{よまわり}は九時打つと廻るんだ。」

「今夜これから襦袢^{じゆばん}の襟^{えり}をかけたたりいろいろ仕度しなくちやならないのよ。明日^{あした}の晩に

でもまた来ますよ。お酒と何かおいしそうなものを持って来ますよ。」とお照は立ちかけて、「お父さん、ここのお家、はばかり厠はどこなの。」

お照は約束たがえず翌日あくるひの晩、表通おもてどおりの酒屋の小僧に四合壇しごうばんの銀釜ぎんがま正宗まさむねを持たせ、自身は銀座の甘栗あまぐり一包を白木屋しろきやの記号しるしのついた風呂敷ふろしきに包んで、再び兼太郎をたずねて来た。甘栗は下のおかみさんへの進物しんもつにしたのである。この進物でかみさんはすっかり懇意になり、お照が鉄瓶てつびんの水を汲くみにと、下へ降りて行った時袖そでを引かぬばかりに、

「お照さん、あなた、お燗かんをなさるんならこの火鉢をお使なさいましよ。銅壺どうこに一杯沸いていますよ。何いいんですよ。家じや十一時でなくつちや帰って来ませんからね。いつその事今夜はここでお話しなさいましよ。田島さん、ねえ、田島さん。」と後からつづいて手水場ちようずばへと降りて来た兼太郎にも勤めたので、二人はそのまま長火鉢そばの側へ坐つた。かみさんとお照はかき餅もちと甘栗をぼりぼりやりながら酌をする。兼太郎はいつになく酔よ払つぱらって、

「お照、お前がおいらの娘でなくって、もしかこれが色女いろおんなだったら生命いのちも何もいらな

いな。昔だったら丹さん^{たん}という役廻りだぜ。ははははは。」

「丹さんて何のこと。」

「丹さんは唐琴屋^{からことや}の丹次郎^{たんじろう}さ。わからねえのか。今時^{いまどき}の娘はだから野暮で仕様がねえ。おかみさんに聞いて御覧^{ごらん}。おかみさんは知らなくてどうするものか。」

「あら、わたしも知りませんよ。御酒の好きな人の事を丹次郎^{たんじろう}ツていうんですか。アアわかりましたよ。赤くなるからそれで丹^{たん}印^{じるし}だつていう洒落^{しゃれ}なんですね。」

「こいつは恐れ入った。ははははは。おそれりや^{おそれりや}恐入谷^{おそりや}の鬼子母神^{きしぼじん}か、ははははは。」

「のん気ねえ。ほんとにお父さん^{とつ}は。」

「酒は飲んでも飲まいでもさ。いざ鎌倉という時はだろう、ははははは。しかし大分今夜は酔ったようだな。」

「お酒のむ人は徳ねえ。苦勞も何も忘れてしまうんだから。」

「だから昔から酒は憂^{うれい}の玉^{たま}箒^{ほうき}というじゃないか。酒なくて何のおのれが桜かなだろう。お酒さえ飲んでいれアお父さんはもう何もいらぬ。お金もいらぬ。おかみさんもいらぬ。」

「そんな事いったって、お父さん、一人じゃ不自由よ。いつまでこうしていられるもんじ

やない事よ。」

「いてもいられなくつても最う仕様がないやな。まアお照そんな話はよしにしようよ。折せ角つかく今夜はお正月らしくなつて来たところだ。お照、お父さんのお箱を聞かせてやろうか。

蓄音機で稽古けいこしたんじやねえよ。」

やがて亭主が帰つて来た。役者の紋をつけたふたこじま双子縞の羽織は着ているが、どこか近在の者でもあるらしい身体付から顔立まで芝居者ものらしい所は少しもない。どうやら植木屋か何かのようにも見れば見られる男で、年は女房とさして違つてもいらないが、しよぼしよぼした左の目尻に大きな黒子ほくろがあり、狭い額ひたいには二筋深い皺しわが寄っている。かみさんは弟にでも物言うような調子で、

「お前さん。田島さんのお嬢さんだよ。頂戴物ちようだいものをしてさ。」

「そうかい。それアどうも。」と言つたきり亭主は隅の方へ座つて耳みみたぶ朶へはさんだエヤシツプの吸すい残りのこを手にとつたが、火鉢へは手がとどかないのか、そのまま指先で火を消した煙草たばこの先を摘つまんでいる。

「どうです。芝居は毎日大入りのようですね。」と兼太郎は酔つた揚句あげくの相手ほしさに、「一杯けん献じましょう。今年の寒さむさはまた別だね。」

「ありがとうございます。御在ございますます。お酒はどうも……。」「と出方でかたは再びエヤシツプを耳にはさんでもじもじしている。

「田島さん。駄目なんですよ。奈良漬もいけない位なんですよ。」

「そうかい。ちつとも知らなかった。酒なんぞ呑のまないに越した事ことアないよ。呑みやアつい間違いのもとだからね。おかみさん、いい御亭主を持ちなすってどんなに仕合せだか知れないよ。」

かみさんは何とも言わずに台所へと立つて膳ぜん拵ごしらえをしはじめた。

路地ろじの内うちは寂しんとしていたので、向むこう側がわの待合吉川で掛ける電話の鈴りんの音ねのみならず、仕出しを注文する声までがよく聞こえる。

「お父さん、それじゃわたし明日からまた先せんにいた日比谷のカッフェーへ行きますからね。通りかかったらお寄んなさいよ。御馳走ごちそうしますよ。」とお照は髪かみのピンをさし直してハンケチたもとを袂たもとに入れた。

兼太郎は酔よつていながら俄にわかに淋さびしいような気がして、「寒いから気をつけて行くがいいぜ。今夜はやつぱり一丁目の友達のところか。」

「どうしようかと思つていいるのよ。今夜はこれからすぐ日比谷へ行こうかと思つていいるの

よ。今日お午過ぎちよつと行つて話はして来たんだし、それに様子はもうわかつているんだから。」

「今夜はもう晩いじゃないか。」

「まだ十二時ですもの。電車もあるし、日比谷のバーは随分おそくまでやってるわ。夏の中はどうかすると夜があけてよ。」

お照は出方の夫婦と兼太郎に送り出されて格子戸を明けながら、

「まあいいお月夜。」

建込んだ家の屋根には一昨日の雪がそのまま残っているので路地へさし込む寒月の光は眩しいほどに明るく思われたのである。

「なるほどいいお月夜だ。風もないようだな。」と上り框から外をのぞいた兼太郎は何という事もなくつついて外へ出た。兼太郎は台処の側にある手水場へ行くよりも格子戸を明けて路地で用を足す方が便利だと思つていたので寝しなにはよく外へ出る。

お照は二、三步先に佇んで兼太郎を待っていたが、やがて思出したように、「お父さんあの人芝居の出方なの。どうしてもそうは見えないわね。」

「むつつりした妙な男だ。もう一年越し同じ家にいるんだが、ろくぞつぽ話をしたことも

ないよ。」

「何だか御亭主さん見たようじゃないわね。わたし気の毒になっちまったわ。」

路地を出ると支那蕎麦屋が向側の塀の外に荷をおろしている。芸者の乗っているらしい車が往来するばかりで人通は全く絶え、表の戸を明けているのは自動車屋に待合ぐらいのものである。銭湯は今方湯を抜いたと見えて、雨のような水音と共に溝から湧く湯気が寒月の光に真白く人家の軒下まで漂っている。

「今夜は馬鹿に酔ったぜ。そこまで送って行こう。」

「お父さんソラあぶない事よ。」

「大丈夫、自分で酔ったと思つてれア大丈夫だ。」

「ねえ、お父さん。あのおかみさんは、わたし御亭主さんに惚れていないんだと思うのよ。」

「何だ。また家のはなしか。」

「惚れていない人と一緒になると皆ああなんでしょうか。いやなものなら思切つて別れちゃった方がよさそうなのにねえ。」

「色と夫婦とは別なものだよ。惚れた同士は我儘になるからいけないそうだ。お前なん

ぞはこれからが修行だ。気をつけるがいいぜ。」

「お父さん。わたしが銀座にいた時分から今だに毎日々々きつと手紙を寄越よこす人があるのよ。わたしの頼むことなら何でもしてくれるわ。随分いろんなものを買ってもらったわ。」

「そうか。若い人かね。」

「二十五よ慶けい応おうの方かたなのよ。この間一緒に占いを見てもらいに行ったのよ。そうしたらね。一度は別れるような事があるツて言うのよ。だけれど末へ行けばきつと望通のぞみりになれるんですツて。」

「いい家の坊ちゃんかね。」

「ええお父さんは銀行の頭取よ。」

「それじゃ大したものだ。あんまり好よすぎるから親御おやじさんが承知しやうちしまいぜ。」

「だから占を見てもらいに行ったのよ。だけれどね、おとうさん。もしどうしても向むこうの家でいけないツて言ったら、その時は一所に逃げようツていうのよ。お父さん、もしそうなったら、お父さんどうかしてくれて。二階へかくまって下さいな。」

兼太郎は返事に困どおりつて出もせぬ咳嗽せきにまぎらした。いつか酒屋の四つ角をまがって電車通へ出ようとする真直まっすぐな広い往来を歩いている。

「大丈夫よ。お父さん、わたしだつて其様向見ずな事はしやしないから大丈夫よ。カッフェーに働いていさえすれば誰の世話にならなくつても、毎日会つていられるんだから。いつそ一生涯そうしている方がいいかも知れないのよ。」

「お照、お前怒つたのか。」と兼太郎は心配してお照の顔色を窺おうとした時電車通の方から急いで来かかつた洋服の男が摺れちがいにお照の顔を見て、

「照ちゃんか。日比谷だつていうから行つたんだよ。」

「これから行く処なの。」とお照は男の方へ駈寄つて歩きながら此方を見返り、「お父さんそれじゃさよなら、もういいわ。さよなら、おかみさんによろしく。」

取残された兼太郎は呆氣に取られて、寒月の光に若い男女が互に手を取り肩を摺れ合して行くその後姿と地に曳くその影とを見送つた。

見送つている中に兼太郎はふと何の聯絡もなく、柳橋の沢次を他の男に取られた時の事を思出した。沢次と他の男とが寄添いながら柳橋を渡つて行く後姿を月の夜に見送つてもういけないと諦をつけた時の事を思出した。思出してから兼太郎はどうして今時分そんな事を思出したのだらうとその理由を考えようとした。

お照と沢次とは同じものではない。同じものであるべきはずがない。お照は不届至極

な親爺おやじの量見違いから置去りにされて唯一人世の中へほうり出された娘である。沢次は家倉はおろか女房児こまでもふり捨てて打込んだ自分をば無造作に突き出してしまった女である。事情も人間も全然ちがつている。しかし夜もふけ渡った町の角かどに自分は唯一人取残されて月の光に二人連づれを見送る淋しい心持だけはどうかやら似ているといえ言われない事もない。

お照はそれにしても不人情なこの親爺にどういうわけで酒を飲ませてくれたのであろう。不思議なこともあるものだ。それが不思議なら、あれほど恩になった沢次が自分を路頭に迷わすような事をしたのもやはり不思議だといわなければならない。

帽子もかぶらずに出て来たので娘が飲ませてくれた酒も忽醒たちまちめかかって来た。赤電車が表通を走り過ぎた。兼太郎は路地へ戻って格子戸を明けると内ではもう亭主がいびきの声に女房が明ける簞笥たんすの音。表の戸をしめて兼太郎は二階へ上り冷切ひえきった鉄瓶てつびんの水を飲みながら夜具を引卸ひきおろした。

路地の外で自動車が発動機の響を立て始めたのは、大方向むこうがわ側の待合からお客が帰る処なのであろう。

青空文庫情報

底本：「雨瀟瀟・雪解 他七篇」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年10月16日第1刷発行

1991（平成3）年8月5日第6刷発行

底本の親本：「荷風小説 五」岩波書店

1986（昭和61）年9月9日

初出：「明星」

1922（大正11）年3～4月

※表題は底本では、「雪解《ゆきどけ》」となっています。

入力：入江幹夫

校正：酒井裕二

2018年3月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪解

永井荷風

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>